

インタビュー

株式会社名村造船所 技術開発センター長インタビュー

2019年4月、当社の船舶海洋事業部 設計本部に船型開発と商品開発を専門に行う技術開発センターが新設されました。今回は、山元技術開発センター長に設立の背景や目的、活動内容や技術開発センター長としての抱負を伺いました。

■技術開発センターが設立された背景は？

燃料価格の高騰や、環境保護規制等によりお客様が求めている船の要求項目は多く、そしてレベルは益々高くなっています。当社はメーカーとしてこれらの要望に応じた品質の商品を提供する必要があります。業界全体としても競争は激化しており、商品開発に力を入れないと負けてしまいます。

開発作業には主に船型開発と商品開発があり、それぞれ船型・省エネ付加物の設計や区画配置・仕様検討等の基本設計を行っています。船型開発においては、試運転の関連作業等で一週間程度も拘束される等、コンスタントに船型開発に取り組めていない状況が続いており、同じく、商品開発においても、引合いおよびテクネゴのたびに開発作業が中断してしまい、十分な取り組みが出来ない状況が続いており、安定的な開発体制の構築が急務となっていました。

そこで、こうした状況を打破するため2017年から商品開発を専任に行うための組織の検討に入り、10月には前身組織となる開発チームを発足させ準備を進め、本年4月より技術開発センターとして組織を発足させました。

技術開発センターは、基本計画チームと船型開発チームの2チーム編成となっています。

基本計画チームは主に市場動向や港湾情報などの各種調査、諸検討、商品プロモーション、新技術開発を担います。

船型開発チームは、船型開発、船尾付加物開発、CFD、操縦性能、実海域性能、竣工船データ解析やまた新技術開発への取り組みも行います。



山元 康博 技術開発センター長

■技術開発センターの組織化について

これまで開発作業は実施していましたが、ただ携わる担当者の所属する組織は分かれていました。組織が異なるとやはり組織それぞれの事情が発生します。例えば、個々の組織によってはその時々で最優先にて注力しなければならないことがあり、開発作業には時間を割けないということも発生します。

組織化の目的としては、所属組織の背景、垣根を取り払い、開発作業を各担当のプライオリティで一番とすること、また、各分野に特化して考えるのではなく、「こんなふうにする方がいいんじゃないか」「こっちのほうが良いんじゃないか」等、全員で協議できる環境とすることにありました。

■技術開発センターの目標とグループ内の位置づけは？

技術開発センターには以下の3つの大きな目標があります。

1. 競合各社に負けない性能開発

近年は燃料価格高騰や環境保護規制の観点からも燃費性能の競争が非常に激しく、少しでも燃費を改善すること

が求められています。

2. 標準船の最適化

燃費、載貨重量、貨物倉/タンク容積、製造コストのバランスが重要で、船体、機関、船殻、船型の4つの視点で互いが融合した最適な標準船を開発しなければなりません。

3. 新技術開発

新型省エネ付加物を考案し、それらが標準装備できるように開発を進めなければなりません。また新しい構造様式やLNG燃料船等の新しい燃料への対応を研究する取り組みも加速しなければなりません。

まずは、「競合各社に負けない性能開発」と「標準船の最適化」を重点的に取り組んでいく予定です。お客様との距離、営業部との連携を考え、東京事務所にもメンバーを駐在させることにしており、開発対象となる船型調査を徹底して行っています。

「新技術開発」については、将来への種まきとして位置付けています。AIやIoTについても今後欠かせません。船の運航で得られるビッグデータを取り出し、予防診断への活用や今後リアルタイムにいろいろなデータを利用していくことになると考えています。

また、名村造船所だけでなく、名村グループ内での役割として、函館どつく、佐世保重工業で製造する商品も開発を行っていく予定であり、グループ3社の技術開発センターという位置づけです。

■技術開発センター員に求めることは？

もちろん我々は新しい組織ですからこれまでにないレベルの高いパフォーマンスが求められています。

発足後に全員を集め、これまで競合各社に負けた事例の情報を共有しました。悔しい事実です。まずは現状我々が出来ていること、出来ていないことを全員が正しく認識することが必要だと考えました。

これまでも開発作業に携わってきた技術開発センター員はよりよい商品を作るために一生懸命に知恵を絞り努力してきました。ただ結果として負けているという現実があるわけです。じゃあ、どうするのか、この差をどうやって埋めるのか、追い越すのかを考えるのが技術開発センター員の仕事です。そのためにはこれまでのやり方に固執せず、柔軟に新しいやり方を吸収することが必要です。原因は今までの頑張り方が足りない、方法が間違っている等色々考えられます。解決策はいろいろな情報を収集し工夫し、実行することが必要です。今まで先輩や上司から聞いてきたこと、設計標準に書いてあること、それだけをやっているでも1~2%くらいは改善されたとしても劇的に差を埋めることはできません。

「名村さんの船が一番いいですね」とお客様に言われるように、技術開発センター員全員が同じ思いです。

お互いを理解し、意見を自由に言い合える環境も必要です。息抜きを兼ねて、有志でバーベキューやキャンプに行き親睦を図っています。

■技術開発センター長としての抱負を教えてください。

当社の特徴として伊万里事業所の1ドックで製造する船種が多いプロダクトミックスという点があります。これに対応するためにも、商品開発も効率的に検討サイクルをまわして各標準船をブラッシュアップし競合各社の開発ペースに劣らないようにする。

また、商品開発は経営方針とも密接に関わります。具体的にどの船型をターゲットとするのか、経営方針に沿った準備を技術開発センターはしなければいけないと考えていますし、マーケットの動向を読むのも大事です。当社のヒット商品であるWOZMAX®はマーケットの動向を適切に分析した結果と言えます。

しかしながら、まずは技術力をあげ、高いレベルとし、競合各社の牙城を崩すことです。「競合各社に負けない性能開発」「標準船の最適化」を実現して早く商品化したいというのが一番の思いです。